

へマルには尻尾がない。

生まれた時から生えていなかったと母狐はいう。親父に噛み切られたんだろうさというのは長老。お前の死んだ親父はたいそうな暴れん坊だったからな。お前なんか狐じゃない、屁こき虫だ。仔狐たちはそうはやし立てる。

へマルは屁丸。生まれてすぐに大きな屁をこいたので、親父がそう呼んだらしい。尻尾がないからだと思う。尻の穴に力が入らないのだ。それとも兎を捕まえられなくて、芋を掘って食べているからか。黽いたちの仲間だろうともいわれる。黽にだって立派な尻尾はあるのだが……。

澄み切った夜空に冷たく巨大な月の浮かぶ季節になると、春に生まれた仔狐たちは長老の下で妖術の稽古を始めるようになる。仔狐たちは妖術を覚えるのを楽しみにもしていたし、兄弟狐や親狐から稽古の厳しさを大げさに伝えられて恐れてもいた。

中でも名門の生まれの仔狐は、尻尾もふさふさとしてツヤもよく、稽古を始める前から、一番

の妖術使いになるに決まっているなどと言いつらしていた。

それも故のないことではない。狐の妖力というものはその尻尾に宿るものと信じられていたからである。尻尾がふさふさと太く、長く、かつ色つやがよいほど妖力も大きいのである。そしてその尻尾の形というものはやはり親から子へと伝わっていくものなのだ。

それなら妖力さえあれば稽古はしなくてもよいのか。これがそうはいかないのである。ちょうど、声の大きい狐の鳴き声が美しいとは限らないように。また、足の速い狐が必ずしも上手に兎を捕まえられるとは限らないように。

何事も稽古が肝心なのだ。

長老はそう言ってから初日の稽古を始めた。

最初は気力を充実させ念を高める練習である。これをまず長老がやってみせた。しかし、仔狐たちには長老が何もしていないようにみえる。何か目に見える結果が出るものと思っただけでも何も起こらない。長老も年だから術を度忘れしたのだらうと思いはじめた。

プポッ、プハッ、プヘッ。

へマルの屁が三度響いた。

「あー、屁をこいてはいかん。あー、このように精神を集中して、妖術を使う準備をするわけだ。では、やってみようように」

やってみようようにと言われても、誰にもやり方がわからない。それでも見よう見まねで地面の上に座り込んで、鼻先を上げて宙をにらんでみたりする。しばらくはそのままじっとしていたが、これでいいのかどうかもわからないし、なにしろ、遊び盛りの仔狐である。じっとしてられない。尻尾がむずむずしてくる。鼻には熟した山葡萄の香りが流れてくる。前足がピクリと動いてしまう。

バーボー、ホワツ。

「屁をこいてはいかん、屁をこいてはいかん」  
それから長老は仔狐たちが精神集中の仕方をまったくわかっていないことに気付いた。どうやって教えたものかとしばらく悩む。悩んでも仕方がないので後回しにしようと思った。

「あー、次は狐火」

長老は軽く息を吐くと、空中に青白い狐火を出現させた。満月の明るい光の中でもはつきりとした輝きを放つ立派な狐火が、長老の上を向いた鼻の先にふわりと浮かんでいる。

仔狐たちはすっかり感心した。へマルも感心した。あまり、感心したので、尻から屁がもれた。音はしなかった。

「あー、まず精神を集中して……。それから、頭の中に狐火を思い浮かべる。あー、こら、すかしっぺもいかん。あー、これは臭い」

長老は尻尾を振って匂いを散らそうとしたが、却って臭い匂いがあたりに広まるばかりであった。

「頭に思い浮かべた火を、こつ頭の中から押し出す」

いい終わる前に、一二つめの狐火が長老の頭上に現われた。

「あー、まだ臭いな。あとは各自稽古を続けるように」

そう言つて長老は退散した。仔狐たちは風上に走った。へマルも一緒になって走った。みんなが走れば一緒に走りたくなる。それが仔狐というものである。そしてへマルはまた屁をこいた。へマルの尻にはしまりが無い。尻尾がないからだと思う。尻尾がないと肛門に力が入らない。我慢しようと思つてもいくら辛抱できない。

仔狐たちはまた臭くなつたので風上に走った。

へマルもなんとなく一緒に走る。追いかけてこのようなものだ。少しも妖術の稽古にならない。そのうちへマルは仔狐たちの集団から押し出されるように風下にまわされた。仔狐たちはようやく稽古が始められるようになった。けれども走り回っているうちに何をやってたのかすっかり忘れてしまった。長老も居なくなってしまったので、何をどうしたらいいのかもわからない。へマルはなんとか妖術を覚えたいと思った。妖術で屁を止めるのだ。狐火なんかよりそういう妖術のほうがずっと役に立つ。

へマルは長老の言っていたことを思い出してみようとした。始めに精神を集中するのだ。前足を揃えて座り、鼻先をやや上に向けて月を見つめる。いつのまにか月はずいぶん高く昇っている。耳をピンと立てて尻尾は体に巻きつける。へマルは尻尾を巻きつけたつもりになる。そして、精神集中、精神集中と唱えてみる。

バフツ、バフツ、バフツ。

自分の屁がうるさくて臭くて精神集中できない。

他の仔狐たちもうまくいかないようで、隣にちよっかいを出したりして、だんだんふざけあい

になってきた。

そんなふうにして、その年一回目の妖術の稽古は終わった。

次回は屁をしない工夫をして来ようとへマルは思った。食べるのをやめよう。何も食べていなければ屁だつて出ないだろう。

季節は進んだ。木の葉はあるいは黄色く、あるいは赤くその色を変えた。涼しい風は冷たい風にと変わっていく。そしてなによりも、狐族の体毛が夏毛から冬毛へと生え替わっていく。仔狐たちの尻尾もふわりと太く膨らんで、妖力を溜めこんでいるかのようだ。

澄みきつた夜空にまんまるの月が昇った時、へマルは妖術の稽古のことをすっかり忘れていた。何も食べないという決心など思い出しもしなかった。

長老狐が野原のまん中でケーンと高く鳴いて、仔狐を呼び集めると、仔狐たちはなんで呼ばれたのだろうという顔をして集まってきた。

「あー、狐火は出せるようになったかな」

そう言われて、狐火って何だっけと思つてから、妖術の稽古をしたことを思い出した。それから、

それって出来るようになったのかなと思ひ、狐火を出そうとして、出来ないことがわかつた。

ブホッ、ブハッ、ボボボボボボ。

あー、そうだった。屁が臭くて長老が逃げてしまったのだとみんなが思い出した。長老も思い出した。

「あー、君、君はこつちに来なさい」

長老はへマルを呼んだ。仔狐のいる方が風上だったのである。

へマルはなんだかわからないけれど長老に呼ばれたので喜んで前に出た。自分が屁をしたことをすぐに忘れてしまふ。そして、あとでまとめて思い出したりする。おとなの狐はへマルが屁をしてもたいてい無視する。屁は止められないし、ごまかすこともできない。そのうち、自分で屁をしたことを忘れてしまふ。

「あー、狐火が出せないのは精神を集中していないからである。これで、精神集中の大切さがわかつたであろう。では、もう一度、精神集中の稽古からやる」

そう言われると、仔狐たちはそうか、精神を集中しなければいけないのだなと思つ。そして、長老がツンと鼻筋を伸ばして月に向かう姿を真

似する。

へマルも真似して首を伸ばして上を向く。首の格好にばかり気が向くと、尻を忘れるなどばかりにプスプスと屁がもれる。

あー、と言おうとして長老は考えこんだ。精神集中のやり方をうまく説明できないのだ。去年も仔狐たちに同じことを教えたはずなのだが、どうやったのかなかない出せない。

ようやく思い出した。

妖術をつかったのであった。なかなか高等な術で、仔狐たちに教えるには難すぎる術である。

観想法読心術という。若い時に牝狐の心が知りたくて覚えた術であった。なにしろ牝狐が牡を手玉に取る手腕ときたら、高等妖術と呼べる領域に入っているのであるから。

観想法読心術を使って、長老は仔狐の心の中を一匹一匹と順番に覗いていく。

長老の格好を真似しようとするもの。なんだかわからないまま、集中、集中と考えているもの。獲物を狙うように目の前のススキの葉をじっと見つめているもの。精神集中をとばして、狐火、狐火と念じているもの。仔狐たちの幼い考えが長老のにははつきりと見て取れた。



出る出る出る、出ちゃう、大きな屁が腹に溜まってきてる。

あー、これはまずいかもしれんと長老が思っているうちに、ボムツと大きな音が響いた。あー、風上でよかった。すると突然風むきが変わって、長老は臭い匂いに包まれた。

「あー、君はもう戻ってよい」

へマルはまた仔狐たちの間に戻った。

長老は獲物を狙うように考えていた仔狐を呼び出した。

「あー、君、君はなかなかよく集中しておる。他の諸君はこの子を見習うように」

見習うようになると言われても、見てわかるものではない。それでも、仔狐たちはなんとか真似しようとおれこれ試している。長老はそうしているいろやっている仔狐たちの心を読んで、うまくやっている子を見つけ出して誉めてやった。少しずつ精神集中のコツのわかった仔狐が増えてきた。

へマルは相変わらず集中できていなかった。どうしても屁が止まらない。屁は派手な音を立てて威勢よく飛び出すこともあれば、だらだらとたれ流すように尻から漏れることもあった。

これだけ大量の屁をこくということは、単に肛門の締まりが悪いというだけではないのだろつ。よほど食べ物が悪いのか、それとも腹をこわしているかだ。前世からの因果かもしれない。

だんだん嫌になってきた。だいたい、妖術の稽古をしていない時はそれほど屁のことを気にしているわけではない。野原のまん中に一匹でいるときなどは、腹に力をこめて一気に屁をこくと実に気持ちがいい。へマルはもう屁を止めるのは無理だと思つて、この際思いきり屁をこいてやろうと仔狐の集団から抜け出した。

すかさずすかさずかと屁が抜けてゆく。もう全然我慢していない。むしろ肛門を広げてへが出やすいようにしている。抵抗がないからみんなすかさずぺになる。次から次へと際限なく屁が出る。

いつのまにか風が止んでいた。へマルの出した屁はひとかたまりとなったままゆっくりと広がっていく。仔狐たちの方にも匂いが漂いだしたが、精神集中しているのでなかなか気付かない。

長い長いすかさずぺがよつやく一段落して、もうこれ以上は出ない。これ以上屁をしようとするやうと実が出てしまつと感ずるまでになつた。

へマルがふと仔狐たちの方を見ると、長老もふくめてみんな気絶していた。

これも一種の妖術と言えるかもしれない。

次の満月までの間、仔狐たちは精神集中の方法についてなにかと話題にした。長老から誉められた仔狐は自慢げにそのコツを語り、他の仔狐は熱心に聞いた。

へマルもそうした話に耳を傾けた。そして、獲物もない荒地にひとりで出かけては、思っ存分屁をこくのであった。屁をこきながら、精神集中の稽古をした。これはなかなか高等な稽古である。何か他のことをしながら妖術を使うのは容易ではない。妖術に優れた狐は二つの術を同時に使うことができるが、そういった高等な妖術にも通じる稽古であった。

そうしてへマルは精神集中の稽古を続けたのであるが、少しも上達しなかった。へマルも稽古が進んでいないことはよくわかっていた。

仕方がないので稽古をつけてもらおうと長老のところに行った。長老は、あー、と言ってから思い出した。こいつは屁ばかりこいている仔狐じゃないか。その上、尻尾もないのでは、見

込みがない。

「あー、わしは何かと忙しい。ハナレに習うがよい」

ハナレは一族の中でも変わりものとして知られている。へマルもその噂は聞いたことがある。長老をしのぐ妖術の使い手だとか、ひどいいたずらものだとか、疫病神だとか。

へマルは一度ハナレに会ったことがある。輝くような銀色の毛皮をした大柄な狐は確かに見るものを威圧するようなところがあった。ハナレは一族の中では珍しい銀狐だったのである。時々色変わりの狐は生まれるものだが、ハナレほど見事な銀色の毛皮を持つものはいなかった。

ハナレの住処は村の離れの山の裏手の高いところにあつた。一匹だけ離れたところに住んでいるからハナレと呼ばれる。もう若いとは言えない年なのに、嫁も取らずに一匹で暮らしているという。

へマルはハナレの住処を訪ねた。いつものように屁をこきながら歩いていった。よその狐の住処を訪ねるときは、不意打ちにならないように風上から近づくのが狐族の礼儀となっている。匂いはこれから訪ねていくという知らせになる

のである。もっとも、屁をこきながら訪ねる狐は少ない。

そういうわけで、ハナレはなんだか臭いやつが来たなと思った。こんなに臭くては仲間はずれにされているのではないかと心配もした。巣穴から顔を出して覗いてみると、変な格好の仔狐が近づいてくる。よく見ると尻尾がない。

尻尾がないとはずいぶん変わった狐である。妖力の元となる尻尾がなくてやっていけるのだろうか。いや、どうも妖力以前の問題のようである。バランスが取れないのか、歩き方もぎこちない。その上、絶えず屁をこいている。大丈夫だろうか。

だいたいハナレは威張っている狐が嫌いである。だから長老狐とはお互いに嫌いあっているような関係である。ヘマルという厄介ものを押しつけるのも長老の悪意かもしれない。その一方でハナレは頼りない仔狐や、怪我をした牝狐なんかをどうしても放っておけない。

「ハナレ……」

「なんだ？」

「妖術を教えて」

そう言われても、尻尾がないんじゃないじゃあ無理では

ないかとハナレは思う。しかし、あまりにも明白な理由なので却って言いにくい。身も蓋もないというか。だいたい、普通の仔狐でもちゃんと妖術を身につけるものは少ないのだ。そのうち自分で気がつくだろう。

「長老と違って厳しいぞ」

へマルは嬉しくなまって思わずコンと鳴いた。断られると思っていたからだ。少しくらい厳しく教えてもらった方が、早く妖術が身につくに違いないとも思った。へマルはやる気だけはたっぷりある。

プウと平凡な屁がでた。

ハナレはその時すでに風上にいた。

「屁のことは気にするな。実を出さなければよい」  
そう言われるとへマルはすごく気が楽になった。楽になつたらまた屁がでた。プププツとでた。

「妖術も基礎体力がなければ使いこなすことはできない。しかし、お前には体力がない。まずは体力を身につけることだ。ついてこい」

ハナレが突然走り出したので、へマルは慌ててあとを追った。全然追いつけない。へマルは他の仔狐の走りにも追いつけないのである。おとなのハナレには追いつけなくて当然だと思つた。

「どうした、早くこい」

仔狐たちはへマルが追いつけないと何回かは待っていて、それでもそのうちじれてしまって、先に行ってしまう。しかしハナレは何度でもへマルを待った。へマルはすぐにバテてしまって、動けなくなった。するとハナレが銀色の風のように走ってきて、いきなりへマルに噛みついた。へマルは驚きと痛みで逃げ出し、ハナレに追いかけて走らされた。

そうしてへマルと追いかけてこをしながらも、ハナレはほとんど常に風上に身を置き、へマルがいくら屁をこいても平気であった。

そんな追いかけてこが半月も続いた。へマルは相変わらずハナレに追いつけなかったが、もともと逃げる方が得意だったせいか、噛みつかれることは少なくなった。

へマルがハナレに追いかけて走っているところ、狐の親子が狩りをしているところにでくわした。へマルが気付かずにやぶの中に走り込むと、雌の雉が飛び去った。あれっと思っていると、親子狐が現われて、獲物を逃がされて怒った狐の親父がにじり寄る。気持ちがいぼんで首をすくめているへマルにハナレがぶつかってきた。

「逃げろ、殺されるぞ。すごく怒ってる」

へマルは全速力で走り出した。

もうこれ以上速く走れないというくらいの速さで、藪の中を突っ切り、茨の茂みを通り抜けた。へマルは尻尾がない分だけ、ほんの少しだが、狭いところを通り抜けられた。茨の刺が尻尾に絡まることもない。

心臓が高鳴り、脚は震え、恐くて仕方がなかったが、同時にわくわくするような気もした。夢中で走って、気がつくのと追手はついてこなかった。あまり夢中で走ったので、屁をこく暇もなかった。追手の気配が遠ざかって安心すると、ボンツと爆発的に屁が吹き出した。

その匂いが風に吹き流された頃、ハナレが現われた。

「なかなか見事な逃げっぷりだ」

へマルはなんとなく嬉しくなった。

「だが、いつまでも逃げているわけにもいかない。ここは代わりに何か獲物を持っていつて謝るしかない。お前もそれだけ速く走れるなら、なんとか獲物を捕まえて来い」

ハナレが尻尾を振って追い立てるので、へマルは仕方なしに獲物を探してとぼとぼ歩きだした。



しばらく歩いていたが、小鳥もネズミも見つからなかった。

気落ちして、弱々しく屁を漏らしていると、突然目の前に兎が飛び出してきた。何かに脅えているのか、へマルにも気付かず走っていく。

へマルはとっさに兎を追いかけた。

さっきさんざん走ったのでくたくたに疲れていたが、それでも必死になつて兎を追い続け、ついには兎がそれ以上走れないほど疲れるまで追い込んだ。

だが、へマルももう兎を捕まえて噛み殺すだけの力はなかった。そして目の前でへばっている獲物を見ながら、疲れて倒れそうになった。その時、ボンと音がして、兎を追いかけていた間に溜まりに溜まっていた屁が一気に吹き出し、その匂いで兎は気を失った。

「おまえの屁も役に立つものだな」  
いつ現われたのか、ハナレはそう言つと気を失っている兎に止めを刺した。

次の日からは精神集中の稽古になった。

走り回つて多少体力が着いたためか、へマルも少しは屁を我慢できるようになったのだ。今度

はちゃんと精神集中できるはずだ。

しかし実際にはなかなかそうはいかず、屁が出るのを我慢するのが精一杯でそれ以外には何もできず、つまりは精神を最大限に集中して、それでなんとか屁を我慢している状態であった。

それも長くは我慢できず、我慢できなくなると溜まっていた分がいつぺんに出るので、たいへんな匂いがしたのである。へマルの様子からそろそろ我慢の限界だろうと察すると、ハナレはついと立ち上がって逃げ出してしまふ。そしてハナレがいなくなると、へマルはとたんに集中力が切れてしまふのだ。

そもそも尻尾がないのだから、妖術の稽古をするよりも、もう少し走る稽古をした方がよいのではないかとハナレは思う。

それにへマルが一番うまく屁を我慢したのは、全力で走っている時である。座って精神集中の稽古をするよりも、走りながらの稽古の方がよいかもしれない。うまくいかなくても、体力は向上するだろう。

そんなわけで、へマルは精神集中の稽古として野山を走り回ることになった。獲物を追いかけるわけでもなく、何かから逃げるわけでもない

のに、全速力で走るのは不思議な気持ちがある。木の根を飛び越え、川を渡り、水の滴を飛ばしながらススキの中を走りぬける。気まぐれに方向転換して、山の中に入り込み、狭い尾根を走りぬける。

なんとなくだけれど、精神集中しているような気がしてきた。集中しているけれど、まわりもよくわかる。赤い木の実が風に揺れていたり、椋鳥が群れをなして飛んでいた、鳥が枯れ木に泊まって下を見下ろして居たりする様子を、へマルは全速力で走りながら感じる事ができた。

そのうち山の向こう側まで走って行くようになった。そうすると、別の狐の縄張りに入り込んでしまったり、あるいは狸の村に迷いこみそうになったりする。そんな時は、謝ろうと思ってあわてて立ち止まるのだが、どう謝ろうかと考えているうちに、ポワンと屁が出てしまうものだから、ますます相手を怒らせてしまう。それでへマルは恐くなって逃げ出してしまふ。

そうは言っても、よその縄張りで狩りをしたわけでもなく、ただ屁をこいたというだけではわざわざ仕返しに来るといふことはなかった。そんなことをしているうちに、へマルは村の境界線

をなんとか覚え込んだ。それから、境界線沿いに村の周りをぐるぐると走り回るようになった。ふと気がつくくと、まあるい月が山の端から昇りはじめていた。

「なんだっけ？ とへマルは思う。何か忘れていたような気がする。何か、楽しいような辛いようなことを。ハナレの住処まで行って、聞いてみたが、ハナレも何だろうなというだけであった。そのうち思い出すだろうと思って放っておいた。だんだん月が欠けていくにつれて、村のあちこちでぼーっとした光が見られるようになった。何だろうと思ってハナレに聞いてみる。

「あれは狐火だな。仔狐たちが覚えたばかりの妖術を使っているんだろう」

「ぼくも仔狐」

「よつやく満月の晩に妖術の稽古があるってことを思い出した。思い出したが、過ぎてしまったのでどうしようもない。」

「ハナレ……」

「ん、なんだ？」

「狐火を教えて」

「さて、狐火なんて妖術の初歩の初歩だが、はたして尻尾のないこの仔狐にできるだろうか？」

ハナレはしばらく考えてみた。まあ、やってみて出来なければあきらめるだろう。

「そんなに難しいことじゃないさ。精神集中をしてから、頭の中で狐火を思い浮かべて、それを頭の外に押し出すようにすればいい。こんなふうに……」

ハナレはそう言って頭の前に狐火を出現させた。

「やってみな」

へマルは精神集中してから、見たばかりの狐火を頭の中に思い浮かべた。それから、それを頭の外に押し出そうとしたが、つるつと滑ってしまつてうまく押し出せない。思い切つて力を込めると……。

ボムッ、ボムッ、ボムッ。

しばらく屁をこかなかつたへマルに油断していたハナレは逃げ遅れて強烈な屁をもろに吸い込んだ。そして、そのまましばらく気絶していた。へマルはハナレが急に倒れたので、きょとんとしてしまった。

「あとはひとりで稽古しなさい」

ハナレは起き上がると、そう言つてふらふらしながら歩み去つた。

それからへマルはひとりで狐火の稽古を続けた。頭の中に狐火を思い浮かべるところまでは出来るのだが、どうしてもその火を頭の外に押し出すことができない。

そもそも頭の中に思い浮かべたものを外に押し出すことなど出来るのだろうか。そんなことまで疑問になってきた。何度やってもうまくいかないでいると、だんだん頭の中に狐火を思い浮かべること難しくなってきた。ハナレが見せてくれた狐火ってどんな風だったっけ？

一度わからなくなると、心に浮かんだ狐火の像はどんどん曖昧になっていく。頭の中から押し出すことのできなかつた狐火が、頭の中から逃げていく。なんとか捕まえよつと追いかけると、いつそうぼんやりと薄れてきて、ついには完全に消えてしまった。

へマルは途方に暮れた。

ハナレからもひとり稽古するように言われたばかりである。長老には一度断られているし、満月の晩に稽古に行くのも忘れたので、頼むのは無理だろう。

遠くの方に狐火が見えた。仔狐が出している狐火だろう。見せてもらおうと思って近づいた。

「やーい、尻尾なしの屁こき虫がきたぞ」

そう言つて仔狐たちは逃げてしまった。そんなに屁が臭いかなあと思つて、ブツと屁をこいて匂いを嗅いでみる。やはり臭かつた。「これじゃあ、みんなに逃げられても仕方がないと思う」。

すっかり気落ちして巣穴の中で丸くなる。普通の狐なら、丸くなつて尻尾の中に頭を入れれば嫌なことも忘れてくつろぐことが出来る。でもへマルには尻尾がない。その上、丸くなると自分の屁がもろに鼻先に吹き出してくる。少しもくつろげない。仕方がないのでまた外に出てなんとか狐火を思い浮かべようとする。

その時、夜空を赤く染めるほどの大きな狐火が見えた。山の向こう側なのにすごく明るく見える。へマルは走り出した。途中で逃げてくる狐に会つた。

「火事だ。山火事だ」

狐火ではなかつた。それでもへマルはその大きな火をそばで見たくて走り続けた。山の尾根に出ると火事を見下ろせた。大きな木が何本も何本も真っ黒になつて燃えていた。煙が空に向かつて幾筋も立ち上り、その煙も、その上の雲までも赤く染まっていた。ごうごうという音がへマ

ルのところまでも響いてきた。

へマルは魅入られたように動けなくなった。狐火とは全然違う。圧倒的な光景だった。

「ばかもの！」

ハナレがへマルの尻に噛みついた。

「さつさと逃げるんだ！」

へマルは我に返って、ハナレの後を追って走りだした。

山火事は朝には消えていた。へマルたちの村には影響はなかったが、山向こうの狸の村は燃えてしまった。兎や鼠などの動物も火事から逃げ出してきていたので、急に獲物が多くなった。

逃げ出してきた動物たちは勝手がわからないので隠れるのもうまくない。隣村の狸も一緒に逃げ込んできたので、獲物の取り合いになっていざこざが起こった。

もともとオレたちの縄張りにいた獲物だからオレたちのものだと言った。ここは狐の縄張りだからここにいる獲物はみんな狐族のものだと狐たちは言った。それでも獲物は十分にいたので大きな争いにはならず済んでいた。

へマルは山火事が頭から離れなくなり、狐火の稽古をしようとしても頭の中に思い浮か



ぶのは山火事のことばかりであった。そしてあるとき、頭の中からその火を押し出すことができた。それは小さな火ですぐに消えてしまったが、ヘマルはついに妖術が使えたと嬉しくてたまらなかつた。ハナレの巣穴に大急ぎで走っていく。

「見て、狐火が出せるようになったんだ」

ヘマルはそう言つて頭の中から火を押し出した。するとハナレはすごい勢いでその火に突進し、頭をこすりつけて火を消した。

「ばかもの！ これは狐火じゃない。燃える火じゃないか、火事になつたらどうするんだ。こんな危ないものを扱う愚か者は人間くらいだ。いいか、二度と出さんじゃないぞ」

ハナレが火傷をするのも構わずに火を消したその慌てぶりと、怒鳴り声の剣幕にヘマルはすっかりしよげてしまった。誉めてもらえると思つたのに。

そもそも、とハナレは語りだした。この間の山火事だつて人間が山に入り込んで、肉食でもないのに狩りだとかいってさんざん動物を追い立てて遊んだ揚げ句、火の不始末で起こしたものだ。

オレたち狐や狸が妖術を使うのも、そういう人間たちを化かして山に入れないようにするためなんだ。それを人間と同じような火を出すので妖術を使う意味がない。

へマルは妖術にそんな目的があったと初めて知った。

もつとも、狸なんかはその目的を忘れて人間の悪習にはまり、酒を飲むようになってしまって、妖術も酒を手に入れるために使うようになったのだが。狐は断じて人間の真似をしてはいけななんだよ。

ハナレの説明を聞いて納得はしたものの、せっかく妖術が使えたと思ったのにそれは狐火ではなく叱られたということだけが心に響いてへマルはうなだれていた。

「もつとも、こんな火を出す妖術を使った狐はこれまでいないからな、意外にもお前には妖術の才能があるのかも知れないな」

へマルがあまりがっかりしているので、ハナレはそんなことはないだろうと思いつながら、へマルを持ち上げた。

「雨の日なら火事になることもないだろうし」  
ハナレはなんとかへマルの元気を出そうとし

たが、あまり気休めにはならなかった。へマルはすっかり気落ちして自分の巣穴に戻った。

もう一度狐火の稽古をしようと思っても、頭に思い浮かぶのはやはり山火事の火ばかりで、冷たい狐火はどうしても思い浮かべることができない。稽古をしないで巣穴の中で丸くなっていると、スカスカスカスカと音もしない屁が連続して放たれ、腐った気分がそのまま屁になったようなひどい匂いがした。

へマルはもう妖術の稽古はやめてしまおうと思ひ、兎でも捕まえようと野山を走り回ったが、一匹も見つからなかった。その代わり狸にばかり出会った。

へマルは狸を見ると、あれっ、狸の縄張りに入り込んでしまったかなと思う。逃げようかなと思つてから、ここは自分たちの縄張りだと思ひ出す。狸のほづがよそものだと気付くのだが、どう対応したらいいかわからないうちに、なんとなくすれ違つてしまった。

「狸には出ていってもらう」

長老は一族を集めて宣言した。

獲物が不足してきたのだ。山火事で逃げてきた

兎や鼠はもうみんな捕まえてしまった。そもそも山火事で死んだ動物もいるし、草や木の実も焼けてしまったのだ。それは全部狸たちの縄張りで起こったことだが、その狸がこちらの縄張りに入り込んできているので、狐の獲物も不足してきたのである。

「出て行かなければ、追い出すのだ」

狐の縄張りだつて余裕はない。狸を追い出さなければ狐が飢える。しかし狸も素直に出て行くはずがない。狸には出て行く先がないのだから。そして戦うことになれば、多くの犠牲が出ることは分かっていた。

「次の満月に妖術合戦を申し込むつもりだ。それまで妖術の稽古にはげむことだ」

それからは毎晩のように狐たちの妖術の稽古が行われた。おとなの狐が本格的に妖術の稽古を始めたので、化身や幻術などの大技が披露された。仔狐たちはこれまでに覚えたわずかばかりの術を懸命に稽古する。

へマルだけはすることもなく、ただうらやましそうにおとなの狐の繰り出す大技をじつと見つめていた。獲物が減つたと言ってもまだ飢えるほどではなく、これから訪れる冬の厳しさも知

らないへマルには、狸たちがそれほどの脅威には思えなかった。

しかし見ているうちにへマルは引き込まれてしまった。幻術は幻術だとわかって見ている分にはかなり面白いのだ。小さな狐が急に大きな人間の姿になったり、姿を消して離れたところから現われたり、頭だけが空中に浮かび上がった。

中でもハナレの妖術は大規模で、轟々と音を立てて地面が揺れたり、背の低い草がたちまち伸びて巨木になったり、細い蔓が猪までも飲み込みそうな大うわばみに変わったりした。

ハナレは長老になってもおかしくないくらい優れた能力を持った狐だった。むかし長老の座を今の長老と争ったことがあるという。その時は牝狐のほとんどがハナレを支持したそうだし、しかし却って牡狐の嫉妬を買ってしまった、毛色の違いやなんかをやり玉に上げられて、今の長老に敗れたという。

それ以来、ハナレは村の外れにひとりで棲んでいる。だが、妖術の実力では今でも村一番だと言われているのだ。

へマルは毎日おとなたちの妖術を眺めていた。

そうすると、やはり妖術への憧れは捨て切れな  
いことに気付く。狐火はハナレに叱られたけれ  
ど、それでも一応術らしいものは使えたのだ。も  
う一度稽古を重ねたら、ちゃんとした術も覚え  
られるのではないか。

へマルはひとりで稽古を始めた。見よう見まね  
で印を結んだりしてみる。もちろん、すぐには  
術にならない。それでもいろいろ試してみる。

ハナレはそんなへマルを見ると、どうしても  
放っておけない。狐火もまともに使えないやつ  
に高等な妖術など出来ないだろうとは思うのだ  
が、つい見かねて口を出してしまつた。

「そうじゃない、そうじゃない。化けた気になっ  
ただけじゃないけな。化けるといふより化かす  
んだ」

そんなふうに見える、へマルには意外に  
も才能らしきものが多少はあるようだのだ。尻  
尾がない割にはよくやるといふ程度ではあつた  
が……。例の狐火のでき損ないにしても、実は  
結構たいへんな術なのではないかとハナレは思  
つようになつた。

やがて月は満ちて空に昇る。

細い谷川の流れをはさんで狐の一族と狸の一族が向かい合った。縄張りを賭けた妖術合戦が始まるうとしていた。しばらくはにらみ合いが続く。相手の出方を見ているのだ。いくら優れた妖術でも、あらかじめ術を掛けられるとわかっていれば、そう簡単には騙されない。むしろ、妖術を掛け返されてしまうことさえある。

緊張ばかりが高まっていく。  
ブバァーン。

緊張のあまり爆発的に飛び出したへマルの屁が合図になって、両陣営は一斉に妖術を繰り出した。出だしは狐族の優勢であった。狐族は風上に位置していたからである。また、へマルの屁にも慣れていた。

仔狐たちはひとつまたひとつと狐火を作り出し、その狐火は群をなして狸たちの頭上を舞い、ぐるぐるとまわってから一つの大きな狐火になって、最後に弾けて散った。一瞬の暗闇。さっきまで明るく輝いていたはずの満月が消えていた。

狸たちは動揺した。狸にとって月は神にも近い存在だからだ。実は狐にとってもそうなのだけれど、狸たちはそんなことは知らない。きつと雲に隠れたただだと狸たちが思い込もうとしてい

ると、まさに、雲の間から金色の月が現われた。  
ああよかった。月は消えていなかったと、狸  
たちが安心新するうちにも雲はどんどん流れて、  
隠れていたものが見えてくる。そこにいたのは  
巨大な狐。月のように見えたのはその瞳だった。  
じろりと狸たちを睨みつける。

狐族がおとなも仔狐も次々と妖術を繰り出す中  
で、へマルはひとり小さくなっていた。一族の運  
命をも決定しかねない戦いの中で、緊張に耐え  
られず、大きな音を立てて屁をこいてしまった  
のだ。

いつもは屁をこいても平気な顔をしているへマ  
ルだが、こんな重大な場面で屁をこいてしまっ  
て、さすがに恥ずかしいと思った。妖術もろく  
に使えないし、目立たないように隅の方に隠れ  
ていよう。そう思って、木のうろにもぐりこん  
で丸くなった。でも、すぐに屁が出そうになる。  
なんとか屁だけは漏らさないようにと、そのこ  
とだけに集中した。

ハナレのもとで精神集中の稽古を重ねた成果  
があつて、今にも漏れそうな状態ながら、なん  
とか屁を我慢しつつづけることができた。我慢す  
ればするほど、出たときにはたいへんな爆発力



となるので一瞬も油断はできない。

妖術合戦の状況は変化していた。

妖術は精神力の戦いである。その点で最初に図らずも相手の意表を突くことになった狐族は有利であった。ヘマルは恥じていたが実は手柄だったのである。しかし、有利な状況は油断を招く。その上、狐族は負けても縄張りが減るだけで追い出されたりはしない。そこから、狸族に比べて真剣味が足りないといえた。

狸族は負けたら後がない。もとの村は焼けてはげ山になってしまったし、ここで勝てないなら他の場所に行ってもその地の種族に追い出されてしまうだろう。それなのに、屁などでふいつかれてしまったのだ。不利な状況になったことで、いつそう真剣になった。そこから狸族に伝わる秘術の数々を繰り出してきた。一瞬も気を抜かずに大技を次々と決めていく。

いつの間にか雨が降りはじめていた。小雨が本降りになり、それでも妖術合戦は止まない。だが、雨はますます激しくなり、谷川の流れも速くなつて、やがて地響きとともに濁流が押し寄せてきた。

「これはいかん。山の上に避難しろ」

長老の言葉に狐たちは妖術を止めてあわてて避難する。だが、水の勢いはますます激しく、山の斜面をどんどん水が上っていく。狐たちは山のとつぺんに追い込まれた。それでも水かさは増しつづけ、とうとう山の上の杉の木が一番上の梢まで水の中に沈んでしまった。狐たちは大水のなかで溺れるばかり。

ハナレも頑張って泳いでいたが、徐々に疲れきてきて、つい水を飲み込んでしまった。その水はしよっぱい味がした。しまった、狸の小便だ。そう気付いたときにはハナレには反撃する力は残っていないかった。

へマルは誰かに呼ばれたような気がした。そうすると、妖術合戦の結果も気になりだした。おそろおそろ、隠れていた木のうるから鼻先を突き出してみる。

狸たちが狐に向かって小便を掛けている。そして、狐たちは後ろ足で立ち上がって前足をさかんに動かしていた。狸の術にかかっているのは明らかである。へマルはハナレの姿を探したが見つけれなかった。

狐族は狸族に負けてしまったようだ。へマルはそう考えたが、狸たちは違った。へマルを見つ

けたのだ。術にかかっている狐がいることに気付いたのだ。この狐を妖術で倒すまでは油断できないと狸たちは思った。

へマルも狸たちの視線を感じた。どうしよう。一瞬ためらってから、木のうろから飛び出した。何もしないで降参するのも癪だから、屁でも引っかけてやろうか、それとも妖術合戦なのだから、狐火だけでも出してみせようか。熱い狐火に驚くかもしれない。雨と小便で草木は濡れていて火事にはなりそうもないし。

そんなことを考えていたせい、両方一遍に出た。頭の前に押し出すつもりは狐火だったが、腹にたまった屁が肛門からすると抜け出し始めたものだから、へマルの意識もそっちに向かってしまった。その結果、狐火は尻のほうから現われた。

あ、屁が出たと思った。溜まっているから一気に出したらまずい。あわてて肛門をすぼめる。だが、屁はすごい勢いだから、ぴたりと閉じることは出来なかった。

そして突然へマルは妖力が漲みなぎってくるのに気がついた。力が体中にあふれてくるような感覚。そして、まわりにいる狸たちの掛けている術の程

度、その術によって狐たちが見せられている幻覚の様子、それらがはつきりと知覚できた。

同時に、これまでハナレに教えられながら使うことの出来なかつた数多くの妖術が、いまなら簡単に使えるということがわかつた。

これはへマルの屁に狐火が引火した結果であつた。へマルの尻から勢いよく吹き出す屁がそのまま燃えだしたのだ。それは狐族の誰ひとりとして持つていない立派な尻尾の形になつた。

狸たちは変な尻尾の狐が出てきたと思つた。そしてその狐に妖術を掛けようとした。

その前に、今の妖術を止めなければならぬ。それで小便を止めようとしたのだが、なかなか小便が止まらない。止まらないどころか、勢いを増している。体中の水分が無くなつてしまひそうなすごい勢いで小便が出つづける。

赤い血が混じつてきたと思つたら、すぽんと金玉が飛び出してしまつた。それから齒、目玉と続いて、何も見えなくなつてもまだまだ小便は止まらない。肝の玉が飛び出すときに、狸は自分が狭いところを通つて広い世界に押し出されるのを感じた。

別の狸は小便をし終わつていた。そしてへマル

が妖術をかけるところを見ていた。相手は一匹だ、いま術をかければ簡単にかかるに違いないと狸は思った。

妖術というものは一匹にかけることも、まとめて何匹かに同じ術をかけることもできるが、同時に二つの術を掛けることは容易ではない。その上、妖術を掛けているときは現実から離れて術の作り出す世界に入り込むことになるので、相手の術にも掛かりやすくなるのだ。

狸はすーっと息を吸い込んで胸を膨らませた。胸から腹へと膨らませていき、後足で立ち上がった頭をあげると巨大な狸になった。どうだと狐を睨み付ける。へマルが恐れ入った風も見せないで、さらに大きく膨らんでいく。

これならどうだと狐を睨み付けようとしたが、膨らんだ腹が邪魔になって足元の狐が見つからない。まあいい、まだまだ大きくなれるぞと、どんどん伸び上がっていくと、ボンとお月様に頭がぶつかった。

お月様にぶつかるとは随分大きくなったものだと狸は自分でも感心し、それにしてもお月様は意外にも柔らかいものだなと思ったら、それは狐の前足の肉球であった。

ぺしや。

狸はそのまま押しつぶされた。

へマルの溜まった屁も終わりに近づき、その勢いは不安定になって尾の形も乱れ、先が二本に分かれたり、三本になったりした。その度にへマルの妖力は増えたり、減ったりしていたが、とうとう燃料が切れて長い屁はやんだ。

へマルは長い屁が終わると、疲れ果てて草の中に倒れ込んだ。草の匂いが強く香った。屁は全部燃えてしまったので、匂いが残らなかったのである。

他の狐たちはへマルが狸族に妖術を掛けている間に、徐々に我に返り、見たこともない立派な尻尾を持った狐が圧倒的な妖力で狸族に幻術を仕掛けているところを見た。

その狐の尻尾は燃える火だったとある狐は言い、別の狐は尻尾が何本にも分かれていたと言った。

後にこの狐は『火尾丸』と呼ばれ、狐族の守り神と考えられるようになる。そして狐たちは勢いよく燃える火のことを、火尾丸の尻尾のようだとして、『炎』と呼ぶようになった。

しばらくへマルは草の中で横になっていた。狐

族も狸族も疲れはてて動けなかった。だが時間が経つにつれて少しずつ変化が起こった。へマルの腹の中に再び屁が溜まってきた。へマルはその屁を我慢するのも面倒なくらい疲れていた。プパポー！。

山の谷間にへマルの屁の音が響き渡る。

「狐族の勝ちじゃな」

長老が勝利を宣言した。